通路

手を伸ばすとちょうど届くあたりの高さに浮ぶ
透明な、しかし輪郭の見える通路
そこを歩く人々

異次元から導かれるものを証とする
例えて言うならは
ほら、私、という偶然

その通路は開かれた場所であることを強いられている
流れる人々のあらゆる認識が雲のように拡がる
それが風を生み、雨を生む

ひとつの都市であり
ひとつの銀河であり
そして、それに過ぎない

確率の雲がたなびきながら人々を包む
包む―――まさにそのような主体であり客体であること
人々はその同時性を喘ぎながら吸い込んでいる

他者を解体することで己も瓦解してゆく
私、という偶然性もここでは単なる確率に過ぎず
別の次元から奪取することでしか得られない

気をつけなければ・・・
手を伸ばしたが最後―――
奪われてしまう

(2005.3.30)